

＜書評＞マリア・ロベルタ・ノヴィエッリ『アニメラマ 日本アニメーション映画史』

著者	土肥 秀行
雑誌名	日本研究
巻	58
ページ	253-257
発行年	2018-11-30
その他の言語のタイトル	Maria Roberta Novielli, Animerama : Storia del cinema d'animazione giapponese.
URL	http://doi.org/10.15055/00007048

マリア・ロベルタ・ノヴィエツリ

『アニメラマ——日本アニメーション映画史』

Maria Roberta Novelli, *Animerama: Storia del cinema d'animazione giapponese*.

土肥秀行



Venezia: Marsilio, 2015

イタリアの日本映画専門家による、初の日本アニメーション映画通史である。

先行する唯一の類似書として、南伊の弁護士でアニメ愛好家による熱のこもった日本アニメーション史がある (Tavasi 2012)。「世界」アニメーション映画史ならば、これまで三度まとめられてきた (Bendazzi 1988; Rondino 2005; Antonini e Tognolotti 2009° Bendazzi 本は英訳あり)。ヴェネツィア大学で日本映画を講じるノヴィエツリにとって、『日本映画史』(Novelli 2001° 葡訳あり) 以来の「歴史」本となる。歴史は、一度編んで終わりとならず、アップデートするなり、範囲を広げるなりして、増補し続けていかなければならない。『メタモルフォーシス——最新日本映画における暴力的要素』(Novelli 2010) は二〇〇〇年代についての更新として、一方、

本書は『日本映画史』で残された空白部を埋めるため、約十五年のち、三年の準備期間を経て世に問われている。

加えて教科書としての効果をすぐに発揮する。発刊とともに、イタリアの大学初となる「日本アニメ史」と銘打った専門講座が立ち上げられており、インターネットを通して授業動画が届けられるという新たな手法に依っている。これは大量の需要(受講者)を見越してのことであろう。トリノ大学のダリオ・トマーゾと並び、イタリアにおける日本映画研究を牽引するノヴィエツリが、アニメ史に正面から向き合うことになったのは、自らの研究教育上の必要性からというだけでなく、時代と社会の要請ゆえでもある。

イタリアにおける日本文化への関心は、日伊国交百五十周年事

業（二〇一五年）でもたびたび振り返られたとおり、当初は高雅な伝統に向けられていたが、この三十年の間にハイテクあるいはポップカルチャーへと移ってきた。二〇〇〇年代以降の若者には、「MANGAとANIMEの国」とのイメージが支配的である。最新の状況として、ローマ有数の展示スペースを擁するパラッツォ・デッレ・エスポジツィオーニに、二〇一七年から翌年にかけて「マンガジア——アジア漫画のワンダーランド」展（英バービカン・センター監修）が巡回し、なかでも日本アニメに捧げられた最終セクション「アニメ」が目玉となっていたことが挙げられる。ちなみに同展示会場で、一九三〇年には「日本美術展覧会」が開催された。横山大観に代表される日本画壇が紹介され、ファシズム政権の支援と、批評界からの好反応や多くの集客により、当時の日本文化理解に大きく貢献した。大観からアニメまでの日本観の変遷を、八十年というスパンで「定点観測」してみると面白いだろう。

海外における日本のポップカルチャー人気という下からの突き上げにより、近年アニメは、「クールジャパン」の名のもとに日本政府の対外戦略に組み込まれた。一方、イタリアでは、子ども向けの娯楽、あるいは商業的であるという偏見から解放に向かうアニメーションが、アカデミックな「文化」の枠組みに取り込まれてきている。こうした動きを受け、さらに推進するのが、ノヴィ

エツリの書であり、オンライン講座である。

ではさつそく本書の検討に入ろう。タイトルの「アニメラマ」は、手塚治虫と虫プロによる実験的アニメーションの真骨頂となる三部作（一九六九〜七三年）にちなむ。かつて『日本映画史』が大島渚の序文を迎えていたように、毎回「後見人的」存在がいる。著者はまず、前置きにおいて、テレビシリーズは扱わない旨ことわる。同じアニメーションでも、映画とテレビを分けてしまうのには異論もあるうが、あくまでも日本映画史という大きな括りに属する一冊であるためだ。映画史家としての矜持（きやうじ）が感じられる大胆な線引きでもある。

たしかに一九六〇年代以降続くテレビシリーズ、それに一九八〇年代に興隆するオリジナルビデオ（OVAないしODA）は、日本のアニメーションを語る上で欠かせない媒体であり、これまでイタリアの熱狂的ファンにより発表されてきた多くのアニメ本では、映画以上の比重を占めていた。一例としてトリノのグループ、旧ネオンエイガによる『アニメ——一九八四年から二〇〇七年までの日本アニメーション史』（Fontana e Tarò 2007）では、むしろ映画が副産物として扱われる。「アニメ」という語が広まるのも、テレビシリーズの興隆にあわせ、日本では一九六〇年代以降、海外では一九九〇年代以降のことである。

といつてもノヴィエツリ本が、「テレビもの」（イタリア語で言う

ところの「小さな画面もの」にまったくふれないわけではない。あくまでも映画を主眼に据えるということである。代わりに充実をみせるのが、全七章のうち前四章を占める「テレビ前史」である。第一章「起源」では、絵巻物や『鳥獣戯画』にはじまり、影絵、幻灯（映し絵）、紙芝居へとアニメ前史が描かれる。漫画史にも関わる『北斎漫画』や諷刺画家・北澤楽天が、アニメにもつながることが語りおこされる。

アニメーションの生みの親ともいわれる仏人コールの作品が、一九一〇年以降、日本でも上映され、一九一七年に初の国産アニメ（当時は「線画」と呼ばれる）、下川凹天作『芋川椋三玄關番の巻』が生まれる。宮古島出身で、楽天の弟子として漫画家としても成功していた下川は、同時期に、それぞれ独自の方法でアニメ製作にあたっていた幸内純一や北山清太郎と共に、日本アニメの父とされる。

ノヴィエツリ本の読者は、引用される作品が確認できるサイト「日本アニメーション映画クラシックス」（東京国立近代美術館フィルムセンター編）を利用するとよい。日本アニメ誕生一世紀となる二〇一七年に立ち上げられており、英語版も整う。他の動画サイトもあわせれば、「副読本」的リストが作れよう。

アニメーション以前のメディア、すなわち下川にとつての漫画だけでなく、幸内や北山における洋画の素養、加えて天活・小林

商会・日活といった既存の有力映画製作配給会社の競合といった諸要素から、新たな映像の誕生が複合的に説明される。もちろん映画（活動写真）の範疇にある「線画」に添えられる「弁士」の意義は、通常の映画史同様であることがわかる。また映画として、当然ながら、大衆への影響力を買われ、教育的・政治的利用がなされていく様も語られる。

いかにも動的新分野らしく、大藤信郎による切り絵アニメーションや音楽との同期といった様々な手法の実験が続く。そこには、一九二〇年代以降、独ロット・ライニガーや、米フライシャー兄弟（『ベティ・ブーブ』の生みの親として知られる）といった外国からの影響もあつたことも指摘し忘れない。海外における研究らしく、歌舞伎や浮世絵など他芸術のレパートリーからの転用、童話や神話への取材、特に想像獣の採用といった日本的なテーマや、受賞歴や特集上映にあらわれる欧州での評価に注意を払う。

ノヴィエツリ「史観」においては、すでにタイトルが示しているように、日本における映画としてのアニメーションの先鋭性が強調される。一九三〇年代には、プロキノのイデオロギーとの親和性をみせる。トーキーをいち早く日本に導入したJ・O・スタヂオでは政岡憲三や円谷英二が人形アニメ制作にあたり、同「漫画室」には「アニメーター」市川崑が在籍していた。田河水泡の人気漫画でアニメ化された『のらくろ』については、描かれる軍

人精神は「あきらかに不自然」との、日本文学の泰斗オルシの『日本漫画史』(Oz 1998)での見方を、効果的に引用している。

ここではまた、アニメ史をまとめた映画史家ノヴィエツリと、漫画史をまとめた日本文学家オルシの対称的な二人を擁するイタリアの日本学界の豊かさについて留意しておきたい。

第二次大戦中の「国策映画」として瀬尾光世によって作られた、日本初の中長編アニメ『桃太郎』二部作にしても、「洗練」と「荘厳」が指摘される。ならば、戦後、アニメの復興が熊川正雄や山本早苗らによって精力的になされていったのも、軍国主義とはまた異なる占領軍からの新たな「縛り」ゆえであつたのがよくわかる。

ノヴィエツリにおいて、アニメーション映画史が、「一般」映画史、さらには歴史そのものとパラレルであるのは、もはやあきらかである。よって戦後日本で激化する労働運動と赤化とレッドパージについても触れる。満州く戦後の中国く日本くアメリカで人形アニメーションを中心に発表した持永只仁のような存在を通して、逆に大文字の歴史を照射することも忘れない。アニメ作家としても重要な足跡を残す漫画家・手塚治虫が登場し、アニメーション産業を本格化させる制作会社の東映動画が誕生するのは、主権回復後の日本である。ここでも有機的な文脈に沿って歴史が語られる。

最終三章(「実験の時代」、「シミュラクル」、「世界制覇するジェネレーションX」)がカバーする一九六〇年代以降は、本来ならばテレビが深く関係し、多くのファン本が重点的に扱う時代である。

しかし一般の認知度とは全く別の尺度で、戦前の実験主義を継承する一九六〇年代、歴史を大胆に読み替える「模倣」の流行する一九七〇年代を描く。ここ三十年の流れは、思想と直結した社会現象としてとらえられるのが興味深い。イタリアでも広く受容された宮崎駿や『アキラ』から、ヴェネツィア美術ビエンナーレに出展したこともある束芋^{たはいも}までが触れられ、映画の枠外に至つて本書は閉じられる。

本文内で、アルファベットに書き換えられ、伊語訳が添えられた用語は、巻末索引で一覧できる。人名と作品名(原題と、イタリアでの英語版通名もしくは伊訳タイトルでも引ける)の索引も、この歴史本の利用価値を増す。

参考文献

Antonini e Tognolotti 2008

Anna Antonini e Chiara Tognolotti, *Mondi possibili: un viaggio nella storia del cinema d'animazione*, Milano: Il Principe Costante, 2008.

Bendazzi 1988

Giannalberto Bendazzi, *Cartoons: cento anni di cinema d'animazione*, Venezia: Marsilio, 1988.

- Fontana e Tarò 2007
- Andrea Fontana e Davide Tarò, *Anime: storia dell'animazione giapponese 1984-2007*, Piombino: Edizione Il Foglio, 2007.
- Novielli 2001
- Maria Roberta Novielli, *Storia del cinema giapponese*, Venezia: Marsilio, 2001.
- Novielli 2010
- Maria Roberta Novielli, *Metamorfosi: schegge di violenza nel nuovo cinema giapponese*, Castello di Serravalle (BO): Epika, 2010.
- Orsi 1998
- Maria Teresa Orsi, *Storia del fumetto giapponese, primo volume: l'evoluzione dall'era Meiji agli anni settanta*, Venezia: Musa Edizioni, 1998.
- Rondolino 2005
- Gianni Rondolino, *Storia del cinema d'animazione: dalla lanterna magica a Walt Disney, da Tex Avery a Steven Spielberg*, Torino: UTET, 2005.
- Tavazzi 2012
- Guido Tavazzi, *Storia dell'animazione giapponese: autori, arte, industria, successo dal 1917 a oggi*, Latina: Tunué, 2012.